

## 檀一雄旧宅

過日福岡へ行った折りに、市営の定期船で小さな島、能古島（のこのしま）へ渡った。バスで狭い一車線道路を上りつめたところに、起伏の多い花園公園がある。花の季節になると園内の花が一斉に開花する。しかし、意外に知られていないのが、この島にはかつて無頼派作家・檀一雄が住んでいたということである。檀の旧宅へ行って見た。島の人の言うままに目指す方向へ向かったが、島の人と道しるべの説明感覚が合わず、ようやく辿り着いた。道路からちょっと坂道を登った小高い丘の上に、大きな木陰に隠れるようにひっそり建つ小さな家で、戸は打ち付けられ荒れ果てたあばら屋だった。だが、ここから見透す海の景色は、中々味わいのあるものだった。ここで詠んだ句に‘モガリ笛 幾夜もがらせ 花二逢はん’というのがある。冬になると相当強い風が吹くようである。檀はここで自堕落な生活に浸る一方で、英気を養っていたとも言われている。惜しいことに、今年5月の‘花逢忌’の際、老朽化したこの旧宅も年内に取り壊されると公表された。

6年前ポルトガルのリゾート地サンタ・クルスを訪れた。ここにも檀一雄が出没？した。大西洋に沈む夕陽に魅せられた檀は、この断崖上の街で、酒蔵に通い、土地の人びとと交流しながら1年半も暮らし、日本へ帰るや一気に‘火宅の人’を書き上げた。いま「檀一雄通り」に沿ってその家は見事に保存されている。いまでも檀を知る人びとは、檀を懐かしんでいるという。檀と交流のあった人たちはみんな好人ばかりなのだ。住みやすい環境と温かい心が、放浪作家の心をとらえ気持ちを癒したのだろう。

能古島を離れるとき売店のおばさんに、檀一雄旧宅へはこのように道案内した方がよいでしょうとおせっかいなアドバイスをしたら、素直にそうしますと応えてくれた。檀が気に入るわけだ。みんな好人ばかりだ。

(近藤)